

# 宣化地方遼時代張世卿壁画墓に描かれた器物 —陶磁器を中心として

李 含

## 論文要旨

河北省宣化地方の遼時代壁画墓は、1974年から発掘調査が始まり、1998年までに14基の墓が発見されていた。中国において、考古学、社会文化史及び美術史学などの視角からの考察が進展しているが、壁画に描かれた陶磁器に関する論述は、非常に限られている。

本論文では、宣化地方の遼時代壁画墓である張世卿墓（1116年埋葬）を中心として検討を試みたい。

宣化地方の遼時代壁画墓は、遼時代晩期漢民族壁画墓の代表とされており、その中の8基が、張氏の墓に当たる。張世卿は、そのなかで社会的地位がもっとも高い人間で、敬虔な仏教徒だった。彼の墓の壁画には、酒器を始め、茶器、日用品、そして花器などの陶磁器が大量に描かれている。張世卿壁画墓の内容は、遼代晩期における裕福な漢民族の日常生活を詳らかに反映している。また、描かれた陶磁器の種類や器形の特徴からは、北宋の陶磁器や金属器からの大きな影響があったことが明らかとなる。さらに契丹族独自の造形をそこに加えることにより、遼国における陶磁器の特徴も認められる。

**キーワード**【遼時代壁画墓、張世卿、備茶図、備経図、花器図】

## はじめに

遼時代は遼朝とも呼ばれ、内モンゴルを中心に、中国の北方を支配した契丹人耶律氏の少数民族政権である。宣化地方は、燕雲十六州<sup>1)</sup>の帰化州（唐時代の武州）に属し、会同元年（938年）より、遼の統治下に治められていた。

本稿は、宣化の遼時代漢民族住民の壁画墓を研究対象とし、さらにその中の張世卿墓に焦点を当てて検討を試みたい。去年の8月及び今年の6月に、学習院大学哲学科教授の荒川正明先生のご指導の下、筆者が二度現地へ赴き、実際に張世卿壁画墓に入り、調査を行っている。張世卿が天慶六年（1116年）に埋葬され、彼の墓の壁画を分析した上、壁画に登場した陶磁器や金属器の様相、そして遼時代晩期における漢民族地方豪族の宗教信仰と価値観を、それぞれの用途などに合わせて整理してみたい。

張世卿壁画墓に関する研究は、中国において20世紀70年代から様々な角度から進められ

てきた。考古学の面において、河北省文物研究所編纂の『宣化遼墓 1974～1993年考古発掘報告』(上下)<sup>2)</sup>及び『宣化遼墓壁画』<sup>3)</sup>があり、他の研究の手掛かりとなっている。社会文化史と美術史学の面において、張鵬氏と李清泉氏の著作からは、比較的新しい研究成果が見られる。張氏の『遼墓壁画研究』<sup>4)</sup>は、各地方の遼時代壁画墓の比較研究を通し、当時の社会文化の特徴を美術史の中で位置付けられていた。李清泉氏は、著書『宣化遼墓——墓葬芸術與遼代社会』<sup>5)</sup>を通し、遼時代の壁画芸術に対して高い評価を行い、壁画の内容を整理しながら、当時の社会背景を元に、遼国における葬式儀礼や宗教信仰などを詳らかに分析されていた。

## 一 張世卿壁画墓の概要

### (一) 宣化地方の張氏壁画墓

遼の歴史は、神冊元年(916年)から保大五年(1125年)まで続き、時間的にみれば、大体北宋時代と並行して存在していた。

遼の政治体制は、遊牧民と農耕民をそれぞれ別の法で治める二元政治である。原則的に、北は契丹族や他の遊牧民族には固有の部族主義的な法で臨み、南は唐制を模倣した法制で臨んでいた。

なお、遼の政権が安定したにつれ、仏教が段々と国教の扱いを受け、社会各方面に強い影響をもたらしていく。

河北省宣化地方は、遼時代において、南京(唐代幽州、現北京)と西京(唐代雲州、現大同)の間に位置する(【図1】)。張氏一族の壁画墓群は、宣化城西の下八里村にある。

この地域は、魏晋南北朝時代から隋唐以降にかけ、北方遊牧民族の衝撃をもっとも多く受けたところであり、ここに生活していた漢民族は、中原地方の漢民族と違い、常に漢民族の統治者と遊牧民族の統治者の間に、自身の所属を変えなければならなかった。このような生活環境は、宣化地方の漢民族住民を、鮮明な遊牧民族の特性を持たせていた所以である。

宣化地方の遼時代壁画墓は、遼時代晩期漢民族壁画墓の代表とされており、その中の8基が、張氏家族の墓に当たる。

一連の壁画墓は、大体前後二つの墓室に分かれ、前室には地面の木製建築に倣い、彩色のアーチ状の入り口、「門楼」が建てられている。後室には棺を置く台があり、木製の棺に経文が書かれ、中には骨灰がある。墓全体は、恰も裕福な家庭の家屋そのものを彷彿とさせる。

### (二) 家族の構成と墓主の身分

張氏一族の壁画墓が、西と東と二つの区域に分かれ、それぞれ張匡正と張世卿とを中心としている。張匡正は、家族全体の祖先であり、張世卿は、社会的地位が一番高い人物である。

壁画墓の墓誌からみれば、張氏家族が代々当地で農業に従事し、地主として土地を賃貸しながら、果物を栽培し、家財を蓄えていた<sup>6)</sup>。典型的な例証として、天災に遭う年でさえ、張世卿が粟を献上し、民衆に与えたため、官位を拝領したとの記載がみられる<sup>7)</sup>。張氏一族は、宣化の地方豪族である。

張世卿の墓誌には、「天慶六年丙申歲閏正月四日、遘疾而終、享年七十有四。」との一文があり、天慶六年（1116年）に病に罹り、74歳で世を去ったことが分かる。ここから逆算すれば、張世卿の生没年が明らかになるが、即ち重熙十一年（1042年）生まれで、天慶六年（1116年）に没するということとなる。人柄については、「慕道崇儒、敬仏睦族」と記されているが、道教に憧れ、儒学を崇め、仏教を敬い、同族と睦んでいたという人物である。ここからみれば、張世卿はまず儒教の教えに従い、同族と親しく付き合い、また信仰の面において、仏教だけではなく、道教に対しても非常に熱心であったことが分かる。このような姿が、同時代における北宋の知識層とよく似ており、北宋文化の影響が感じられる。張世卿の価値観と宗教信仰は、彼の墓の壁画に鮮明に反映されていた。

なお、張世卿の官位について、墓誌には「(特授) 右班殿直、累覃至銀青崇祿大夫、檢校國子祭酒、兼監察御史、雲騎衛。」とあるが、全て散官、散位であり、即ち名誉の称号のみで、職と実権を持っていないと考えられる。

## 二 張世卿壁画墓に描かれた器物

張世卿壁画墓の略図（【図2】）から、墓の作りが大まかに分かる。墓道という、地上から地下の墓室に通る通路から降りて、高い天井のあるスペースが設けられ、そこに扉があり、向こう側には、前室と後室と、二つの墓室が作られている。壁画は、満遍なく墓室の壁と天井に描かれているが、本稿では、前室の儀仗図と、後室の備茶図、備經図、備酒図、そして描かれた花器に焦点を当てて検討してみたい。

### （一）前室の儀仗図（【図4・5】）

平面図から見る儀仗図の位置は、前室に入ってから左側の西壁にある。

儀仗図には、墓主である張世卿が外出する際、随行の侍従たちの様子が描かれている。

（【図4・5】）

五人の侍従がおり、全員男性で、漢民族の服装を着用し、墓の外に向いて立つ。左側から馬を引く人、傘を持つ人、帽子を持つ人、服を持つ人と、一番後ろに立つ什器を頭上に支える人が並んでいる。

馬や馬車を用い、外出の儀仗を表す図像は、漢時代から壁画墓と画像磚の画題として描かれてきた。唐時代には、馬が馬車に替わり、儀仗図の主な構成要素となった。傘は、馬に乗

る時の専用道具であり、帽子と同じく、墓主である張世卿の身分と社会的地位を強調している<sup>8)</sup>。

儀仗図に描かれた陶磁器は、画面右側の人が支えた漆盆の中に集中している。かなり大きなお盆は、色からみれば、表黒裏朱塗りの漆器と思われ、中には水注と承盤のセットと、形の違う二、三種類の盃、そして盃の下敷きとなる盆が入っている。器形と色からみれば、陶磁器の可能性が高いと考えられる。

遼の領域は、北宋時代の北中国の陶磁器の窯が含まれることがあり、また、定窯や耀州窯は、遼の領域と極めて接近した位置にある。遼墓から出土した陶磁器の中には、定窯、耀州窯、磁州窯、さらに南方の越州窯や景德鎮窯の青磁や白磁がみられ、言いかえれば、北宋で生産された、いわゆる輸入陶磁器があり、また、遼の国内で生産された陶磁器の器形なども、北宋の影響がかなり強く見られる<sup>9)</sup>。

張世卿墓の副葬品ではないが、参考例として、遼時代の伝世品を取りあげた。【図7】の酒器セットは、壁画と同じく、水注と承盤との取り合わせとなる。両方とも、器の表面に芭蕉文が刻まれている。色がやや黄ばんでおり、北宋のものに倣って作られたものと考えられる。定窯の製品に比べると質が落ちるが、器形などはかなり忠実に写されている。窯は、定窯系の磁器を焼いた遼時代後期の官窯である林東窯の可能性が高い。

このような水注と承盤のセットは、唐宋時代において非常に流行っていた。使用する際に水注に酒を入れ、やや幅の広い承盤に熱湯を注ぎ、水注を承盤に入れて、酒を温める。

漆盆の中の杯とその近くにある下敷きの盆は、後述する後室の備酒図と合わせてみれば、使い方が分かる。即ち杯を下敷きの盆の中に一つずつ並び、酒を入れてから運んでいく。

## (二) 後室の備経図、備茶図と備酒図

後室には、南壁の備酒図、東壁の備経図、そして西壁の備茶図について分析を試みたい。

平面図からみれば、備茶図と備経図は相対する壁面に描かれており、備酒図は入り口から入って左側にある。

### 1 備経図 (【図9・10】)

備経図は後室の東壁にあり、画面には、三人の侍従が描かれている。

全員が男性で、服飾から見れば、漢民族であることが分かる。左側の人が隣の人に話しかけており、画面中央に立つ人が盤口長頸瓶を机の上に置こうとしている。右側の扉から、もう一人が面取りの箱を持って、部屋の中に入ってくる。

画面の左側手前に、赤い机が一台あり、上には面取り箱、天目台付の天目碗、盤口長頸瓶、漆と思われる小箱、香炉、経典などが置かれている。なお、顔料が大部剥落してしまったが、机の下に大きな火鉢があると考えられる。

面取り箱は、画面右側に描かれた扉から入ってくる人の手に持っているものとはほぼ同形であり、経箱の類と考えられる。經典は、画面を拡大してみると、【図 11】のように、表紙にはそれぞれ「常清浄経」と「金剛般若経」とが書かれていることが分かる。

『常清浄経』は、全称『太上老君説常清浄経』で、道教の代表的な經典の一つである。作者不詳だが、魏晋時代（220～420年）に成立したと考えられる。『金剛般若経』は、全称『金剛般若波羅蜜経』で、仏教の重要な經典の一つと数えられる。北魏時代（386～534年）に既に中国語の訳本があり、唐時代（618～907年）に入ってから、広く信仰されるようになっていた。

仏教と道教という違う宗教の經典が共に卓上に置かれるということは、何か特別な意味があるように思われるが、実際に張世卿の墓誌に書かれた「慕道崇儒、敬仏睦族」、即ち道教に憧れ、儒学を崇め、仏教を敬い、同族と睦むという文言を合わせて考えると、当時の宗教信仰と価値観が垣間見える。

遼時代において、建国初期から仏教が重んじられていた。いうまでもなく、宋時代における仏教信仰の影響も大きかった。張世卿墓の壁画からみれば、当時、遼の領土に生活していた漢民族は、仏教だけではなく、北宋に流行っていた道教と、中原地方における伝統的な儒教の教えも、悉く受け入れていたと考えられる。

儒教と道教が中国固有の思想であったが、仏教は後漢時代（1世紀頃）にインドから伝わったものであったため、常に中国の固有思想と衝突しながら発展を遂げていた。宋時代になると、儒学には理学という新しい思想が生まれ、信仰の面において虚無を唱える仏教と道教の教えを斥けながら、自身の思想もまた仏教と道教の思想の素地を借りて発展していた。一方、仏教と道教は、現実社会において優位に立つ儒教と並存するため、儒学から様々な教えや論理を取り入れていた<sup>10)</sup>。このような風潮は、「三教合一」と呼ばれ、北宋だけではなく、周辺各国にも大きな影響をもたらした。

張世卿の「慕道」「崇儒」「敬仏」は、正に当時における仏、道、儒に対する認識を反映している。また、墓誌には、「慕道崇儒、敬仏睦族」の一文に続き、「悟是知非、徇義忘利、不畏豪強、不侮寡弱、天下之善道尽企而行」と記されており、張世卿の人柄について、是を悟り非を知り、義に従って私利を忘れる。強者に対して恐れず、弱者に対して侮らない。天下の善行を全て自ら行う、と評している。これこそ三教における、人間に対する共通の理想像であり、現実において儒教の教えに従って立身出世し、死後の世界において仏教と道教が唱えた天に登り、極楽浄土に入るということが、人々の夢であったことが分かる<sup>11)</sup>。

続いて、經典以外の器物を順番に分析を試みたい。

卓上の二冊の經典の間に、黒漆二段重ねの合子と香炉（【図 12】）が置かれている。

黒漆の合子は、香炉との位置関係を考えたら、恐らく香盒の可能性が高い。香炉は、三つ足蓋付で、金属或は陶磁器の類だと考えられる。

中国における香盒の歴史は、前漢時代まで遡ることができる。前漢南越王の墓から出土された香盒は、樹脂で作られた香料が入っており、径9.5cmの赤漆であった。唐時代には、金属器の香盒が流行っており、宋時代になってから、陶磁器の香盒が愛用されるようになる。張世卿墓の壁画に描かれた香盒は、色から見れば漆器と思われ、小ぶりの作りとなっている。

宋時代において、香炉の器形が様々あるが、三足のものが青銅器から形を取ったと考えられる。机が多用される当時の建築様式に合わせて、小形の物が多く作られていた<sup>12)</sup>。壁画に描かれた香炉は、近くにある香盒とほぼ同じ高さとなっており、蓋つきの物である。

机の奥には、経箱の隣に天目台付の茶碗が描かれている。天目台は、色からみれば黒漆の物で、茶碗は、白磁の天目碗だと思われる。

茶碗の右側には、盤口長頸瓶が置かれているが、今までの通説において、湯瓶と説明されてきた（【図13-1】）。ところが、画面をよく見てみると、瓶の口縁部に花の葉片が見え、さらに上の部分に花房と思われるものがある。恐らく顔料が剥落し、花枝が見えなくなったと筆者が考えている（【図13-2】）。

証左として、張世卿の甥に当たる張世古の壁画墓（天慶七年（1117年）埋葬）の備経図の画面を合わせて取り上げた（【図14】）。構図は、張世卿墓とよく似ており、机に置かれた長頸瓶には、はっきりと一輪の花が挿されている。

伝世品の参考例は、遼時代前期から陶磁器を生産していた乾瓦窯の白磁盤口長頸瓶を取りあげた（図15）。素朴な作りで、美しい曲線のついた胴体と、細い脚と長い首という組み合わせは、巧みにバランスをとっている。

張世卿墓に描かれた備経図には、経典と共に、茶、花、香という要素が揃っている。一か所に花器、茶器、経箱、香道具を飾るという行いは、宗教的な意味を持っていると考えられる。曹魏時期（220～266年）において、中国語に訳された『無量寿経』<sup>13)</sup>には「懸繪然燈、散華燒香、以此回向、願生彼國。」との記載がみられ、懸繪（絵を掛けること）、燃燈（灯を燃やすこと）、散華（花を供える）と（焼香（香を焚くこと）は、共に「四供養」に数えられる。

家主の精進のために、一台の机の上に何種類かの供養を供えるという行いは、遼時代晩期において、仏教や道教などの宗教信仰が既に日常生活の中に溶け込んでいたことを如実に反映している。それは宗教的な飾りであると同時に、個人の趣味でもあり、宋時代における知識層の好みと価値観が如何に遼の漢民族に影響をもたらしたかが読み取れる。

なお、張世卿墓には描かれていないが、大安九年（1093年）に改葬された一族の先祖である張匡正の壁画墓における備経図に、文房具の筆と筆架、そして硯が描かれている。（【図16-1・2】）

張匡正の改葬は、張世卿の主導の下に行われ、目的が先祖顕彰である。図柄の選択について、張世卿の意向に従ったものと考えて間違いのないであろう。大安九年と天慶六年の間には

23年ほどの差があるため、図柄などの変化が当然あるが、両方とも遼時代における読経と写経の場に置かれた実物を参考にして考案されたものだと考えられる。

張世卿墓の備経図に描かれた要素と張匡正墓のそれと合わせてみると、経巻と一緒に置かれるのは、茶、花、香、文房具がある。当時において、ある程度既に定型的な飾り方となっていた可能性がある。

## 2 備茶図（【図17・18】）

備茶図は、東壁の備経図と相対して、後室の西壁に描かれている。

画面には二人の侍従がおり、漢民族の服装を着ている。左側の人が天目台のつく茶碗を持ち、一手で茶杓を取り、お茶を入れようとしているか、或は攪拌しているように見える。右側の人が湯（とう）瓶（びん）を持ち、茶碗にお湯を注ごうとしている。机には二つの天目台付きの茶碗が置かれ、奥には黒漆二段重ねの大きな合子があり、手前には杓が入った鉢がある。机の下に火鉢があり、湯瓶がみえる。

遼時代の宣化地方は、地元で茶樹が成長しておらず、お茶に関する全ての製品が、南の北宋から輸入されなければならなかった。従って、茶に関する作法も、宋のものを習っていたと考えられる。

宋時代の茶法は、大別して煎茶と点茶との二種類に分かれる。煎茶法とは、磨り潰された茶を熱湯に入れて煮込んでから飲む作法で、点茶法とは、茶の粉を茶盞に入れ、熱湯を注いで立てるということである。前者は唐時代において既に行われていたが、後者は宋時代に入ってから生まれた作法であり、比較的に新しい茶法となる<sup>14)</sup>。張世卿墓の備茶図をみると、明らかに当時流行の点茶の様子が描かれている。

漆器の天目台と磁器の天目との取り合わせは、本日において見慣れる形となるが、いつ頃から始まったのであろうか。南宋時代末期に成立した『夢梁録』という書物は、当時の首都である臨安（現杭州）の風物が記されている。中の「茶肆」、即ち茶屋という段には、茶盞についての記載がみられる。

「向紹興年間、（中略）用銀盃杓盞子、（中略）今之茶肆、（中略）止用瓷盞漆托供売、則無銀盃物也。」<sup>15)</sup>とあり、昔の紹興年間（1131～1162年）には、（茶屋は）銀製の鉢、杓、茶盞を用いていたが、今の茶屋は、専ら磁器の茶盞と漆の茶托とを用いて茶を売り、銀の鉢類がなくなった、とのことである。ここからみれば、天目台と天目の材質は、元々同じものであったが、13世紀前期になると、台が漆で碗が磁器というのは、最も流行りの取り合わせとなったことが分かる。出土品からみれば、金属器以外にも、陶磁器の天目台・碗のセットもあるので、両方とも使用されていたと思われる。

張世卿墓の備茶図を見てみると、漆の天目台と白磁の茶碗との取り合わせを用いたことが分かる。言い換えれば、遼時代晩期、乃ち北宋末期において、既に「瓷盞漆托」という取り

合わせがあり、しかも宋だけではなく、周辺各国にも影響があった。

天目は、宋時代において大量に作られたが、参考例として取り上げたのは、遼の製品である（【図19】）。この碗は、口縁部がわずかに歪みがみられ、高台裏の「官」字款と合わせてみれば、恐らく遼の官窯である林東窯に生産されたものだと考えられる。器形が宋のものとはほぼ一致しており、極めて簡素な作りとなっている。

湯瓶は、点茶の道具の一つに数えられ、熱湯を入れる容器である。器形は仏教と共にインドから中国に伝わり、もともと金属器であった。宋時代に入ってから、陶磁器の写しも作られるようになる。

宋時代の茶書『茶録』には、湯瓶の材質についての記載がある。「黄金为上、人間以銀、鉄或瓷、石为之。」<sup>16)</sup>とあり、金製品が一番望まれるが、民間には銀鉄或は陶磁器の湯瓶を作る、と記されている。

壁画に描かれたものは、金属と陶磁器両方の可能性がある。参考例は、唐時代の銀製品で、余分な飾りがなく、非常に素朴な作りとなる。（【図20】）

机の奥にある大きな黒漆二段重ねの合子は、餅茶或は茶菓子の入った箱であり、手前になる鉢は、色からみれば白磁とみえるが、中に杓が入っているので、水などの容器の可能性もある。

備茶図という壁画は、張匡正墓にもあるが、画面構成は張世卿墓とかなり異なる。（【図21】）

張匡正墓の備茶図に登場した人物は、女性と子供しかいない。役割もお茶を磨り潰したり、運んだりしてただけで、お茶を点てる人が描かれなかった。対して張世卿墓の備茶図は、お茶を点てる場面に焦点を当て、登場人物が男性のみとなる。これらの相違点から、遼時代晩期における点茶作法は、女性と子供があくまで下準備する立場におり、お茶を点てるのは、男性だけであったということが窺える<sup>17)</sup>。

### 3 備酒図（【図22・23】）

備酒図は、後室の南壁にある。画面には、二人の男性侍従がおり、何れも漢民族の格好をしている。二人とも朱塗りの机の後ろに立ち、一人が承盤のつく水注を抱え、もう一人が杯を盆に入れて持っている。

机の上に、承盤のつく瓜形水注があり、他には杯が二種類ほどがおいてある。また、長頸瓶があり、これも酒器と思われる。隣に大きな黒漆盆に載せられる杯が三つある。

更に机の手前には、棚に固定された梅瓶が三つ並んでおり、蓋がついている。明らかに酒器として用いられる。

備酒図に描かれた器物のいくつかは、前述した儀仗図にも登場していた。お互いに照合しながら、備酒図の器物を整理してみたい。

水注と承盤とのセットは二点あるが、卓上に置かれた方が瓜型となっており、侍従の抱えた方が、よりシンプルな丸い形を取っている。

液体を入れる容器は、中国において元々全て「壺」と呼ばれていた。『礼記』の「礼器」篇には、「五献之尊、門外缶、門内壺、君尊瓦甒。此以小為貴也。」<sup>18)</sup>とあり、諸侯貴族が宴を開いて、五献の儀式を行う際に用いる酒器は尊と呼び、扉の外には「缶」という大型酒器を用い、扉の中には壺という小型酒器を用いる。君主は陶器の酒器を重んじるが、これは小を以て尊しとなすことである、と記されている。また、後漢時代に成立した『説文解字』という中国最古の辞書において、壺について「昆吾鬻器也。」<sup>19)</sup>と説明し、即ち陶磁器の神である昆吾の創案した丸い器だという意味となる。酒器の材質は元々陶器だが、春秋戦国時代(紀元前770～221年)において、青銅器が重んじられた。晋時代(265～420年)になってから、磁器の酒器が製造されるようになり、唐時代中期に入ると、取っ手と注ぎ口のつく水注が段々流行り始める<sup>20)</sup>。

水注と承盤とのセットは、陶磁器以外に金属器もある。張世卿墓の壁面に描かれた物の色をみれば、恐らく陶磁器の可能性が高い。瓜型水注の参考例は、ふくよかな瓜型の胴に、六角形に削られた注ぎ口と、滑らかな曲線を表す取手がついている。承盤の白釉は、微かに青味が見られ、輪花口となる。この作品は北宋の景德鎮窯の製品で、遼への貿易陶磁だと考えられる。(【図24】)

一方、より素朴な作りとなる水注と承盤セットの参考例として、遼の領域内に作られた作品を取りあげた(【図25】)。

白釉の発色がやや黄ばんでおり、承盤の口縁部に歪みがみられる。乾瓦窯の製品で、定窯の作品の写しだと考えられる。文様について、【図7】と同じく刻花の芭蕉文だが、当時における好まれる植物文様の一つであろう。

机の右手前に置いてある盤口長頸瓶は、色からみれば白磁とみえる。瓶が液体を入れる容器の一つと数えられ、酒以外にも水を入れたりするが、時には花器や観賞陶器としても用いられる。備酒図の長頸瓶は置かれる場所から考えると、酒器として使用される可能性が高いが、器形は前述した備経図に描かれた花器の盤口長頸瓶とよく似ている。

参考例の盤口長頸瓶(【図26】)は、遼の乾瓦窯に焼かれたもので、金属器の器形に倣って作られたと考えられる。釉薬にはわずかに色むらがみられ、如何にも実用品だと思われる。

備酒図に描かれた杯は、盆に入れてあるものと、机に逆さに重ねておいてあるものと分かれる。盆に入れてある杯は、二つ或は三つ一組で、黒塗りの漆盆に並んでいる。これは恐らく遼時代における杯を運ぶ際に使用された道具であろう。前室の儀仗図にも、杯の隣に下敷きの盆が描かれている(【図6】)。

杯の材質は、金属と陶磁器がある。唐時代には、金銀器の杯がかなり使用されたが、遼時代に入っても、唐の遺風が引き継がれていた。

遼時代初期の契丹人貴族耶律羽之(890~941年)の墓から出土された金製杯は、非常に精巧な作りとなっている(【図27】)。文様について、魚、雁等の動物文と蓮、唐草などの植物文が刻まれる。

金属器に比べると、陶磁器の杯が非常に素朴な形となる。(【図28】)

参考例として取り上げた陶磁器の杯は、それぞれ遼の領域で焼かれた白釉杯と北宋の青磁花形杯となるが、器形からみれば、遼のものが極めてシンプルな造形となっている。一方、北宋の耀州窯の製品が、よく金属器の器形を写しているが、焼き物特有の柔らかさが強調される。なお、寸法について、両方とも金属器とほぼ同寸である。

壁画の一番手前に、低い朱塗りの棚に、梅瓶が三つ嵌められている。ここから、当時における酒器としての梅瓶の使い方が分かる。

梅瓶の起源について諸説があるが<sup>21)</sup>、「梅瓶」という名称は、案外新しいものらしく、清末の文献に初めて確認できる<sup>22)</sup>。宋時代において、「梅瓶」という呼称が文献には見つからない。代わりに、「経瓶」という酒器に関する記載が所々にみられる。

北宋末期(1051~1134年)の人趙令時的著書『侯鯖録』には、「陶人之為器有酒経焉。晋安人盛酒以瓦壺、其制小頸、環口、修身、受一斗、可以盛酒。凡饋人牲兼以酒、置書云、酒一経、或二経至五経焉。」<sup>23)</sup>とあり、陶工が酒器を作り、経と呼ぶ。晋安地方(現福建省所属)の人が陶磁器の壺に酒を入れるが、その器形は首が小さく、丸口で、胴が細長い。瓶一本で酒一斗が入る。贈答用の酒や肉など贈る時、書状を残し、曰く、酒一経あり、或は二経から五経までであると記されている。他にも、同じく北宋末期から南宋前期に生きた人袁文が書いた『瓮牖閑評』という書籍に、「今人盛酒大瓶、謂之京瓶、乃用京師之京字、意謂此瓶出自京師、誤也。京字当用経籍之経、晋安人以瓦壺小頸、環口、修腹、受一斗、可以盛酒者、名曰経。則知経瓶者、当用此経字也。」<sup>24)</sup>とあり、今の人が大きな瓶を使い酒を入れる。この瓶を京瓶と呼び、都から伝わったものだと思われるが、間違いである。京ではなく経典の経という字を用いるべきだ。晋安の人が陶器の瓶を使うが、首が小さく、丸口で、胴が細長い。瓶一本に酒一斗が入るが、これは経と呼ぶ。即ち経瓶というのは、経という字を使うべし、という意味である。

今日において、梅瓶は花器としてのイメージが強いが、宋時代には主に酒器として使用されていたことが上述の文献から窺える。壁画の梅瓶は、色からみれば青磁と思われるが、口にまだ赤い封が押さえられており、開いていないことが分かる。

参考例としてとりあげたのは、時代がやや下がった南宋・龍泉窯の青磁梅瓶である(【図29】)。共蓋付きで、後世によく知られる梅瓶のスタンダードの形となる。

### (三) 張世卿墓の花器

前述した備経図に描かれた花瓶(【図9・10】)以外にも、張世卿墓において花器がみられ

る。なお、大安九年（1093年）に改葬が行われた張匡正の墓には、張世卿墓と異なる系統の花器が描かれていた。張世卿の墓誌には花器に関する記載がみられるが、今までの先行研究において、壁画の花器と照らし合わせての分析がまだ行われていない。張世卿墓の花器と墓誌の関係、そして大安九年（1093年）から、張世卿が埋葬された天慶六年（1116年）の間における花器の種類と変遷の傾向について推測をしてみたい。

張世卿墓の花器は、全て後室に描かれる。

南壁入り口の上に、盤花が描かれている。また、東壁、北壁、西壁の三面に渡り、壁画の上部には、一周りに18個の花瓶が描かれ、中には牡丹や蓮の花が生けてある。（【図30】）

盤花というのは、口が広く、底が浅い花器に花を生けるといふ花の飾り方である。南壁の盤花は、扉の真上に描かれ、両側に飛龍が雲と水玉にまわり、一匹ずつ飛んでいる。（【図31】）

ここでは、盤花が通常宝珠の描かれる位置に置かれ、龍に囲まれる。仏教において、供花が供養の一つと数えられるので、護法善神である龍が傍に護持するという構図は、宗教的な意味を持っていると考えられる。

花器の色は濃紺となっており、中に色とりどりの花が生けてある。牡丹と菊以外にも、桔梗らしき花がみられ、何種類かの花が飾られている。（【図32】）

一方、花瓶に生ける花、即ち瓶花という形で描かれた図柄は、後室の壁画の上部に一周りみられる。ここでは、備経図のある東壁の写真を取りあげ、分析を試みたい。（【図33】）

瓶花というのは、瓶に花を生けるといふ飾り方で、盤花と同じく、仏教の供花として始まったと考えられる。

張世卿墓の瓶花は、備経図のものを除き、全て具体的な生活場面を表す壁画の上部と、木造建築の梁に倣って描かれた屋根の下部との間に位置している。花器の色は、盤花の花器と同じく濃紺であり、器形が盤口長頸瓶と思われる。花の種類は、牡丹と蓮などがある。（【図34】）この二種類の花は、唐時代から供花として好まれた花材である。

張世卿の墓誌には、「特造琉璃瓶五百只、自春泊秋、糸日採花、特送諸寺致供。」とあり、生きている間の作善の一環として、特別に五百個の琉璃瓶を作り、仏に供えていたことがわかる。壁画にこれだけの瓶花が描かれたのは、宗教的な意味があり、墓主を顕彰するためのものだと考えられる。従って、花瓶が濃紺というのは、ガラスを表す可能性がある。

さらに、墓誌における花に関する記載は、琉璃瓶以外にもみられる。「特于郡北方百歩、以金募膏腴、幅員三頃、尽植異花百余品、迨四万窠」とあり、特別に宣化城の北に高い値段で良い土地を購入し、珍しい花を大量に植える。種類が百を超え、本数が四万に至る、と記されている。花器だけではなく、仏に供える花までを自分で栽培するというのは、張世卿が供花に対して非常に拘りを持っていると考えられる。これは恐らく当時における園芸技術の発達にも関係している。

宋時代に入ってから、園芸ブームと共に、花卉の栽培技術が急速に進化し始めた。宮廷、民間、そして寺社において、年中に渡り、四季折々の花が飾られる<sup>25)</sup>。このような大規模な社会風潮は、当然宋周辺の地域にも影響をもたらし、備経図に飾ってある瓶花からみれば、仏教信仰や点茶儀礼などに伴い、瓶花と盤花という供花の飾り方、そして花卉栽培の技術なども、遼に伝わってきた可能性が十分にある。

一方、張匡正墓の花器と花に関する壁画は、張世卿墓と異なる様相を呈する。

張匡正墓の花器は、一か所しかみられない。後室南壁の両側に、一对の花壺があり、牡丹が中に生けてある。(【図35】)花器の下には、藤材の小棚が置かれる。(【図36】)

花器が描かれた場所をみると、棺が置かれる台の後ろにあり、木造建築の梁に倣って描かれた屋根の下部に位置している。

花を大型の壺に入れて飾るという飾り方は、唐時代において非常に盛んに行われていた<sup>26)</sup>。張匡正墓の花器は唐の遺風を反映し、張世卿墓における宋風の飾り方と異なる。

なお、張匡正の墓誌には、花や花器に関する記載がなく、壁画の花壺は、宗教的な意味があるだろうが、生前の作善ではなく、単なる死後の飾りとして描かれていた。

また、張匡正墓において、花自体もかなり強調されている。本論文には触れていないが、張世卿と張匡正との墓の後室の天井には、両方とも星座図が描かれている。特に張匡正墓には、星座図と屋根との間に、さらに一回りに花枝の区域が設けられている。

花の種類は、牡丹、蓮、夕顔などがあり、非常に写実な画風で身近な草花が描かれている。(【図38】)

屋根より上、星座図より下という位置関係は、既に現実に存在する花ではなく、天上から降りていた花を表していると考えられる。言いかえれば、張匡正墓の花は、墓主生前の善行を表彰するための散華であり、死後に仏が来迎する時に現れた祥瑞なのである。それに対して、張世卿墓の花が屋根の下に描かれ、現実生活における一部だと暗示している。なお、花が花器にいけてあるというのは、墓主生前の作善として実際に仏に供えたものだと捉えられる。

### 三 まとめ

張世卿墓の壁画内容は、具体的な場所、即ち家屋内外に限定されており、墓主本人生前の営みを暗示する一方、死後も変わらぬ精進を通し、極楽に近づこうとする憧れを表している。

前、後二室を通して、具体的な場面、即ち儀仗図、備経図、備茶図と備酒図に登場した人物は、全て男性であり、身分は侍従と思われ、服飾は明らかに漢民族である。これは墓主である張世卿の社会的な身分と関係しており、即ち官位を持つ人間としての誇りを反映している。また、遼時代の二元政治は、国土南部において唐の法制で治めていたため、当地の漢民

族が遊牧民族の文化に影響されながらも、唐時代、そして宋時代の中原文化になお強く憧れを持っていた。漢民族の服装を着る侍従という要素は、恐らく当時、遼の国土に生活していた漢民族の豪族にとって、名誉な象徴と考えられるであろう。

前室の儀仗図は、まず張世卿の生前の身分の高さを強く主張し、後室に入ってから死後の生活と精進に関わる壁画が、墓室の方角に従って描かれる。東壁には、朝の光景が描かれ、最初は扉の外から侍従が入ってきて、読経の用意をしている。机には経箱と經典の他、お茶、お香とお花も飾られ、仏教における朝の務めの設えが設けられる。西壁には、お茶を準備する場面が見られ、北宋における最新の点茶法でお茶を点ていることから、遼の漢民族富裕層の流行感覚が捉えられる。お茶を飲む時刻が既に午後か夕方となったであろうか、更に南壁の備酒図には燭台が描かれ、明らかに夜の宴の様子を暗示している。

壁画に描かれた花器と墓誌の記載とを合わせて考えると、高価な瑠璃製の瓶などを用い、仏に供えることにより、功德を積んでいく様子が分かる。北宋の陶磁器に倣って作られたもの、或は北宋から直接に輸入されたものを使用し、当時の流行を追う遼の漢民族豪族の生活実態が窺える。遼時代晩期において、裕福な漢民族家庭にとって、宗教が既に日常化しており、仏教や道教という宗教信仰が、日常生活の不可欠な一環となっていた。遼の国内で生産された陶磁器の器形は、北宋の影響がかなり強く見られる。壁画からみる陶磁器と金属器は、墓主生前の晴やかな場で用いられ、機能的な美しさ、言いかえれば「用の美」が感じられる品々であった。

## 注

- 1) 燕雲十六州は、幽雲十六州とも呼び、938年に遼が後晋から割譲されて支配した十六の州のことである。具体的には、朔州・寰州・応州・雲州・蔚州・新州・武州・儒州・媯州・檀州・順州・幽州・薊州・涿州・瀛州・莫州の計16州を指す。燕は燕京（幽州、現在の北京）を中心とする河北北部、雲は雲州（現在の大同）を中心とする山西北部のことで、燕雲とはこの二州を中心として万里の長城周辺に位置する漢民族の定住農耕地帯にあたる。
- 2) 河北省文物研究所『宣化遼墓1974～1993年考古発掘報告』（上下）、文物出版社、2001。なお、本論文における張氏一族墓誌に対する引用は、全て注2の文献資料によるものである。
- 3) 河北省文物研究所『宣化遼墓壁画』、文物出版社、2001。
- 4) 張鵬『遼墓壁画研究』天津人民美術出版社、2008。
- 5) 李清泉『宣化遼墓——墓葬藝術與遼代社会』文物出版社、2008。
- 6) 本論文における墓誌の原文は、全て注2に掲載した考古発掘調査の記載を引用したものである。張匡正の墓誌には、「治家事親、動式規矩」という一文があり、家中をよく治め、しきたりに準じて身を持っていたことが分かる。張文藻の墓誌には、「勤勞於家、果致財産饒給、方已具萬。」との記述がみられ、家事に励み、財産を蓄え、既に萬と数える、という意味となる。張世本は、「既勤且儉、庶己克家。雖農務之末、亦嘗親之。至於栽培園果、經營籍産、日有所増」となり、励みながら節約し、謙遜な人柄で、よく家中を治める。農業のような粗末な業務も、身を持ってこなしていた。果樹を栽培し、果物を育て、先祖伝来の産業を経営し、財産が益々増

えていく様子が窺われる。

- 7) 墓誌には、「大安中、民谷不登、餓死者衆、(中略)公進粟二千五百斛、以助国用。皇上喜其忠赤、特授右班殿直、累覃至銀青崇禄大夫、檢校国子祭酒、兼監察御史、雲騎衛。」との記載がある。大安年間(1085~1094年)、不作の年があり、餓死する人が甚だ多い。張世卿は国のために、二千五百斛の粟を献上した。遼の皇帝が彼の忠誠に喜び、特別に右班殿直の官位を下賜した。張世卿は後に銀青崇禄大夫、檢校国子祭酒に昇進し、また、監察御史、雲騎衛をも兼任していた。
- 8) 前掲注5参照。郭若虚は『図画見聞志』の「衣冠異制」という段に、「軒車廢自唐朝」と書いている。絵画において、馬が馬車に替わり、外出を表すという傾向は、唐時代において完成されたことが分かる。傘について、『通典』や『事物紀原』などの唐宋文献に記載があり、北の遊牧民族の風習だと考えられ、皇帝は赤と黄色、官僚庶民は青の傘を用いる、とのことである。張世卿墓の儀仗図の傘の色も、この記載に一致して青色である。
- 9) 『世界美術大全集・東洋編 第5巻 五代・北宋・遼・西夏』小学館、1998.
- 10) 査慶、雷曉鵬『宋代道教審美文化研究——兩宋道教文学与芸術』四川大学出版社、2012.
- 11) 前掲注5参照。
- 12) 揚之水『香識』人民美術出版社、2013.
- 13) 全称『仏説無量寿經』で、曹魏の康僧鎧訳。
- 14) 揚之水『兩宋茶事』人民美術出版社、2016.
- 15) 宋・呉自牧『夢梁録』三秦出版社、2004.
- 16) 唐・陸羽等『茶經記注(外三種)』上海世紀出版股份有限公司・上海古籍出版社、2017.『茶録』は、北宋時代の蔡襄(1012~1067年)の著作である。
- 17) 前掲注5参照。李氏は張世卿墓の備茶図について、男性中心だと論述されていた。
- 18) 王文錦編『礼記訳解』中華書局、2016.
- 19) 漢・許慎著『説文解字』中華書局、2013.
- 20) 韓榮『有容乃大——遼宋金元時期飲食器具研究』江蘇大学出版社、2011.
- 21) 一説には、梅瓶の起源が唐時代まで遡ることができると唱え、証左として、唐時代李寿墓の石棺の線刻画に、梅瓶らしきものを抱える侍女が刻まれる。他の説には、契丹人が遊牧生活において、移動しやすいように創案した鶏足瓶が梅瓶の原型であると主張する。杜文「淺談梅瓶的源流与淵源」、『収蔵界』2003年第2期、中国香港収蔵界雜誌社。
- 22) 清・寂園叟『匋雅』山東画報出版社、2010.
- 23) 宋・王得臣、趙令時『塵史・侯鯖録』上海古籍出版社、2012.
- 24) 宋・袁文、葉大慶『瓮牖閑評・考古質疑』中華書局、2007.
- 25) 黄永川『中国插花史研究』西泠印社出版社、2012年。
- 26) 晩唐の羅虬は、「花九錫」という文章の中に、花壺のことを「玉缸」と書いている。これは大型の白磁の花器と考えられる。

## ENGLISH SUMMARY

### On Utensil depicted in Zhang Shiqing's Mural Tombs of Liao Dynasty at Xuanhua -Focused on Ceramic Ware-

LI HAN

The excavation investigation of the mural tombs of Liao dynasty in Xuanhua area of Hebei province

began from 1974, and 14 tombs were found by 1998. eight of the tombs located to the northeast of Xiabali Village belong to the Zhang Family. Zhang Shiqing was buried in 6th year of Tianqing (1116).

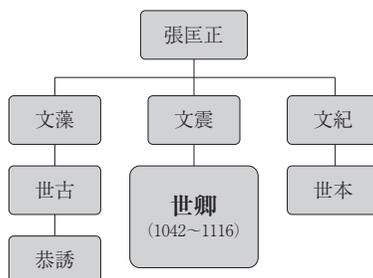
This thesis takes the first excavation area of the mural tombs at Liao Dynasty in Xuanhua, that is, the Han nationality mural tombs at Liao Dynasty, as the research object, and focuses on the tombs of the Zhang Shiqing's to carry out investigation and analysis.

Tea is important beverage in ancient China, there are many scenes related to tea drinking in the murals. These scenes reflected the significant position of tea drinking in the social life at that time. The murals in the tomb shows us the living custom and dresses of people in the region at that time. Most of the figures in these murals are in the dresses of Han style and only a few exceptions. Evidently, the culture and customs including hairstyle and dresses of different people were influencing and changing each other during the process of the conflicting and combining among them.

*Key Words:* mural Tombs of Liao Dynasty, Zhang Shiqing, mural of tea, mural of wine, mural of vase



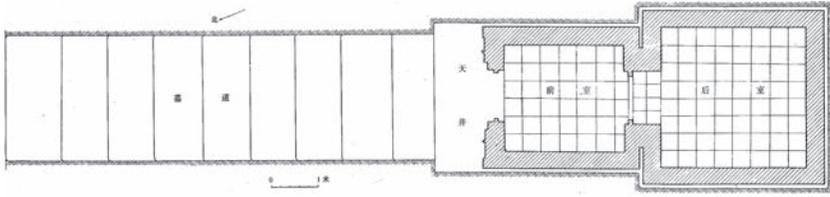
【图1】燕雲十六州略図



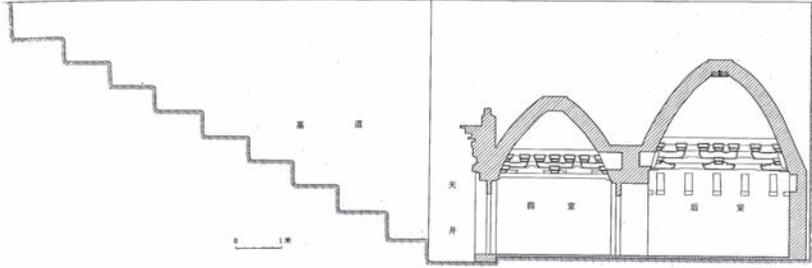
【表1】張氏一族系譜図

位置	壁面内容
南壁	門衛二人
東壁	散楽図
北壁	門衛二人
西壁	儀仗図

【表2】張世卿墓前室壁画の位置

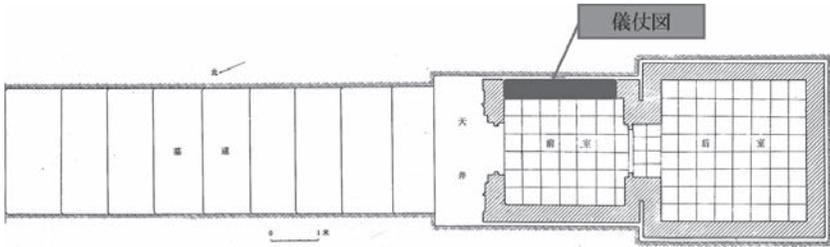


图一五四 MI 平面图



图一五五 MI 纵剖视图 (由东向西)

【图 2】張世卿墓略図



【图 3】儀仗図位置略図



【図4】儀仗図



【図5】儀仗図線描復元図



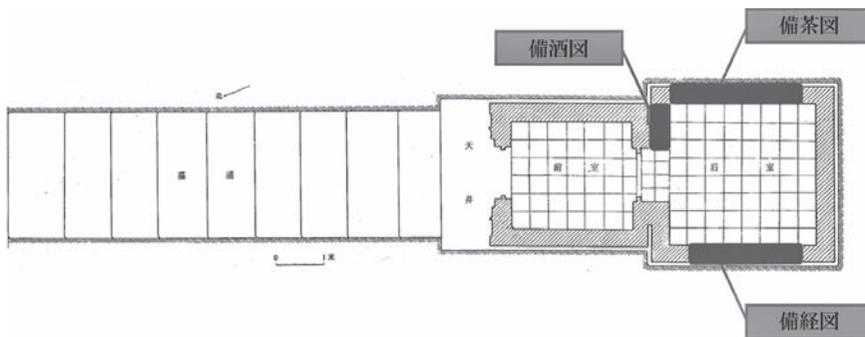
【図6】儀仗図に描かれた陶磁器



【図7】白磁水注及び承盤 遼時代（10～12世紀）林東窯  
総高 22.5 cm 水注口径 4.0 cm 遼寧省鉄嶺地区民衆芸術館文物組

位置	壁画内容
南壁	双龍に盤花
	備酒図
	箱と鉢を持つ侍従
東壁	備経図
	団扇と手ぬぐいを持つ侍従
	箱を開ける侍女
北壁	双鳳門と侍従
西壁	箱を開ける侍女
	唾壺と払子を持つ侍従
	備茶図
	戸を開く婦人

【表 3】 張世卿墓後室壁画の位置



【図 8】 後室壁画位置略図



【図9】備経図  
東壁(全体) 302.0 cm×193.0 cm



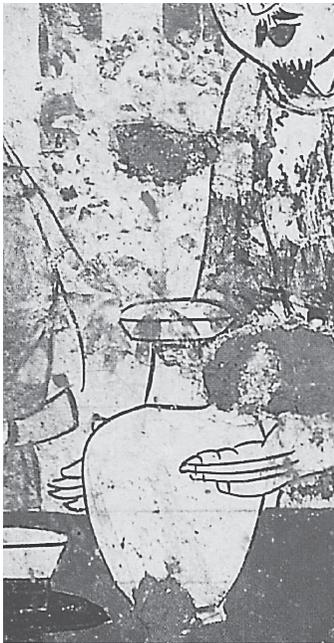
【図10】備経図線描復元図



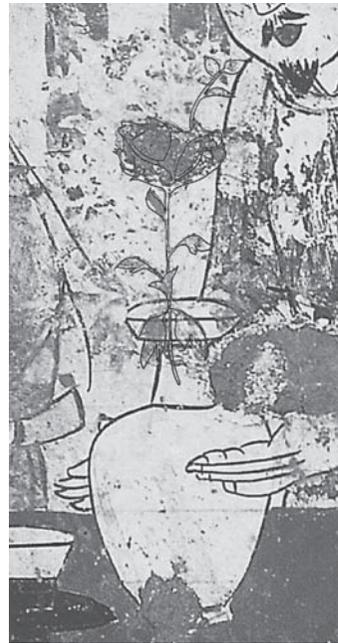
【図11】備経図に描かれた經典



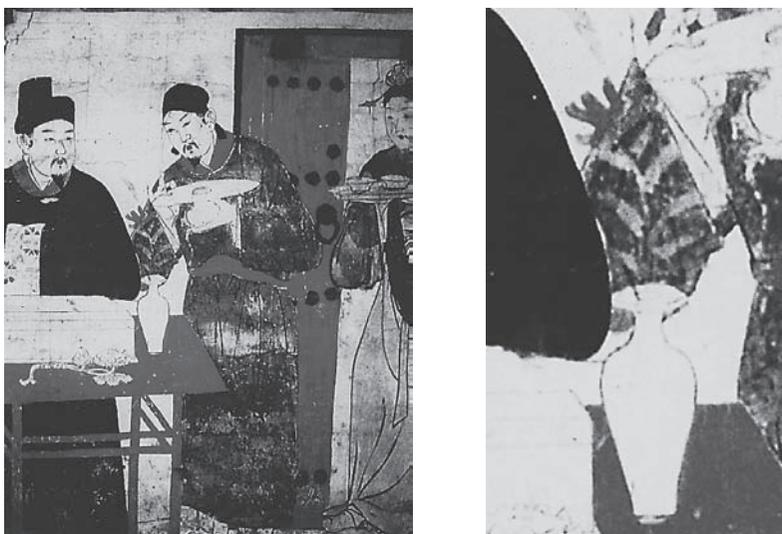
【図 12】 備経図に描かれた合子（左）と香炉（右）



【図 13-1】 備経図に描かれた盤口長頸瓶



【図 13-2】 花と花器の復元案



【图 14】張世本墓備經圖及び花器拡大図  
(全体) 137.0×156.0 cm



【图 15】白地盤口長頸瓶 遼時代 (10~12  
世紀) 乾瓦窯  
高 39.4 cm 口径 10.0 cm 遼寧省博物館



【図 16-1】張匡正墓備經図  
東壁文房具図(全体) 240.0 cm×100.0 cm



【図 16-2】張匡正墓備經図  
西壁經卷図(全体) 240.0 cm×100.0 cm



【図 17】備茶図  
西壁(全体) 302.0 cm×193.0 cm



【図 18】備茶図線描復元図



【图19】白磁「官」字款碗 同底款 遼時代（10世紀）林東窯  
高6.0 cm 口径20.8 cm 遼寧省博物館



【图20】銀製湯瓶 唐時代（9世紀）  
（左）高22.0 cm 口径8.4 cm （右）高19.0 cm 口径6.6 cm  
江蘇省鎮江市博物館



【図 21】張匡正墓備茶図 181.0 cm×152.0 cm



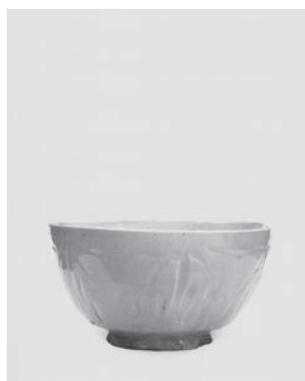
【図 22】備酒図  
南壁（全体） 305.0 cm×193.0 cm



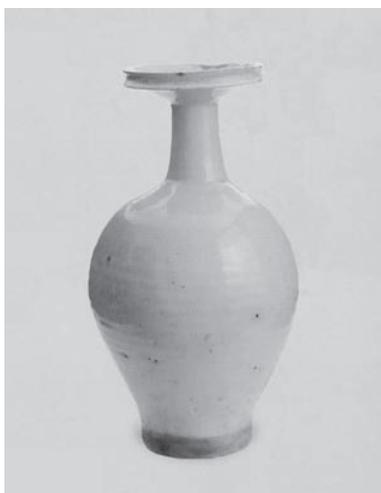
【図 23】備酒図線描復元図



【図24】青白磁水注及び承盤 北宋（10～12世紀）景德鎮窯  
総高 21.5 cm 水注口径 4.0 cm 胴径 15.0 cm 底径 7.1 cm 高 16.5 cm  
承盤口径 18.3 cm 底径 8.6 cm



【図25】白磁刻花水注及び承盤 遼時代（10～12世紀）乾瓦窯  
水注口径 3.5 cm 底径 7.8 cm 高 21.5 cm  
承盤口径 18.6 cm 底径 8.6 cm 高 9.8 cm



【図26】盤口長頸瓶 遼時代（10～12世紀）乾瓦窯  
口径 11.8 cm 胴径 18.3 cm 底径 10.0 cm 高 32.8 cm



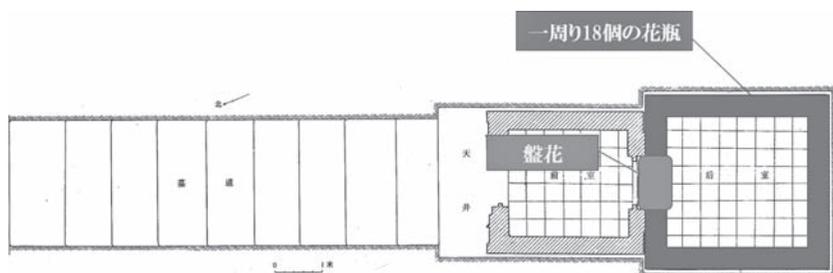
【図 27】(左) 金製雁花喰文杯 口径 7.7 cm 底径 4.2 cm 高 3.0 cm  
(右) 金製芦雁文輪花杯 口径 7.3 cm 底径 4.0 cm 高 4.9 cm  
遼時代 (10 世紀) 内モンゴル文物考古研究所



【図 28】(左) 白釉杯 遼時代 (10~12 世紀) 乾瓦窯  
口径 7.9 cm 底径 3.4 cm 高 3.4 cm  
(右) 青磁花形杯 北宋 (10~12 世紀) 耀州窯  
口径 8.4 cm 高 5.3 cm



【図 29】青磁蓋付梅瓶  
南宋時代 (1195 年)  
龍泉窯  
高 28.5cm  
浙江省松陽県博物館



【図30】張世卿墓に描かれる花器の位置図



【図31】盤花双龍図  
南壁（全体）305.0 cm×193.0 cm



【図32】盤花拡大図



【図 33】 東壁に描かれた花器と花



【図 34】 瓶花拡大図



【图 35】張匡正墓後室南壁の花器図



【图 36】花器拡大図



【図 37】 張匡正墓後室南壁の上部に描かれた花卉図



【図 38】 花卉拡大図